

エミリー・ディキンソンと自然科学

萩原 萬里子

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-86) の詩には、当時の著しい自然科学¹⁾の進歩に対する彼女独特の反応を映し出したものがある。William Howard によると、彼女の作品の中の328語は、“parallax” (視差), “perihelion” (近日点), “calyx” (萼) 等の科学的な専門用語であり、最先端の学問に対する詩人の旺盛な好奇心と、言葉への情熱が窺える。本稿では主にディキンソンが科学に対して抱いていたと思われる考え方を、そして当時の科学の状況や、彼女が受けた科学教育を探ってみたい。

I

19世紀初頭、ディキンソンの生まれ育ったマサチューセッツ州の小さな町アマストにも科学の波は押し寄せていた。それは1827年に Tucherman によって書かれたアマスト・アカデミーにおける自然科学教育についての、次のような文章からも窺うことができる。

The opportunities at Amherst during the early years of College for the study of the natural sciences were exceptional. The teachers in the scientific branches were second to none in New England, even if Harvard and Yale be included in the comparison.²⁾

ディキンソンは1840年9月にアマスト・アカデミーに入学し、1847年8月に卒業、同年マウント・ホリヨーク・フィーメール・セミナリーに入学、1848年に退学している。彼女がその期間に受けた科学教育は、各分野の優れた専門家による充実した内容のものであった。それは彼女が使用した教科書の一部を覗いても明らかである。化学の Benjamin Sillman 著 *Elements of Chemistry in the Order of the Lectures Given in Yale College ...* (1830-1831), 地質学の Edward Hitchcock 著 *Elementary Geology* (1843), 生理学の Calvin Cutler 著 *Anatomy and Physiology* (1847), 植物学の Almira H. Lincoln (Phelps) 著 *Familiar Lectures on Botany* (1838), 天文学の Denison Olmstead 著 *A Compendium of Astronomy ...* (1839) その他数多くある。³⁾

ディキンソンは友人の Abiah Root に宛てて1845年5月に “I have four studies. They are Mental Philosophy, Geology, Latin, and Botany. How large they sound, don't they?”⁴⁾ と得意げに書き送っている。これは教課の半分が自然科学分野のものであることを示している。兄の Austin に対しても、1847年12月に、“Chemistry, Physiology & quarter course in Algebra”⁵⁾ を学んでいると告げ、1848年1月には再び Abiah に、“I am now studying Sillman's Chemistry & Cutler's Physiology, in both of which I am much interested.”⁶⁾ と述べている。これらの手紙からも、ディキンソンが自然科学の教課を、興味をもって学習していたことが明らかである。

特に、化学、地質学、博物学を担当していた Edward Hitchcock は Sewall が指摘しているように、詩人としてのディキンソンの成長に大きな影響を及ぼした。Hitchcock は講義だけでなく、牧師としての説教や演説の他に、生徒や町の人々を伴って地質学や植物学の实地見学旅行を行ったりしていた。彼には *Religious Lectures on Peculiar Phenomena in the Four Seasons*⁷⁾ という題目で、ディキンソンの在学中に行われた講演を基にした著書がある。たとえ彼女が講演を直接聞かなかったとしても、後に読むことが可能であっただろう。この講演の内容は、科学的な観察と創造主に対する信仰に基づくものであった。

ディキンソンを初めアマストの人々は、講演や実地見学旅行の他に、月刊誌 *Atlantic Monthly* 等に掲載される科学関係の記事に目を通してもいた。また、1876年にはフィラデルフィアで独立百年祭記念博覧会が行われ、ディキンソンと親しく、頻繁に文通を交わしていた Elizabeth Holland は、その博覧会に出かけていたようだ。Holland 夫人はディキンソンに宛てて、その間に聞き逃がした Charles Wadsworth の説教、“God’s Culture” の写しを送るよう、依頼の手紙を書いたと思われる。その返事にディキンソンは、“The Sermon you failed to hear, I can lend you—though Legerdemain is unconveyed—”⁸⁾ と述べている。説教の内容が“Legerdemain”「手品」のように巧妙で科学博覧会に匹敵するほどであったことを仄めかしている。この博覧会には蒸気機関を初め、Alexander Graham Bell (1847-1922) 発明の電話機、Thomas Alva Edison (1847-1931) の電信機、その他、発電機、印刷機、カメラ、ミシン等が並んでいた。⁹⁾

II

前述したように Hitchcock 等科学者たちの教えは、科学と信仰が深く結びついたものであった。*Elements of Chemistry ...* の著者 Benjamin Sillman も “Chemistry is that science which investigates the composition of all bodies. ... sister to the science of Natural Philosophy ... all derived from the phenomenon of the Creator”¹⁰⁾ と述べている。このように科学と信仰が深く結びついた考え方に対して、ディキンソンはどのように反応したであろう。次に挙げる作品は、Hitchcock を初め当時の科学者の説に対する彼女の考えを表わしている。

The Chemical conviction
That Nought be lost
Enable in Disaster

(164)

My fractured Trust—

The Faces of the Atoms

If I shall see

How more the Finished Creatures

Departed me! (954)¹¹⁾

何も消滅してしまうものは無い
という化学的な確信は
思いがけない不幸の折に砕けてしまった
わたしの信仰に力を与える

原子たちの顔を
もしわたしが見るのなら
わたしから去った 生きていた人たちの
どれほど多くを見ることだろう！

ディキンソンは、この詩の第一連において、まず化学と信仰を肯定的にうたっている。しかし第二連では、“slant”で間接的ではあるが、疑念を投げかけ、一連の信仰と化学が調和した考え方を曖昧なものに置き換えている。

“The Chemical conviction”（化学的な確信）は、Hitchcockが著書、*The Religion of Geology and Its Connected Sciences* (1851)の中に表わしたような考え方を暗示している。彼はこの本の中で、燃焼や人間の体に関する化学的な発見について、次のように述べている。

... no case of combustion, how fiercely soever the fire may rage, annihilates the least particle of matter ; ... fire only changes the form of substances. Nay there is no reason whatever to suppose that one particle of

matter has been annihilated since the world began.¹²⁾

ディキンソンがこの、物質の不滅を思わせるような科学者の説を心底信じていたのなら、第二連に暗示している疑念が浮かぶことはないであろう。Hitchcockの「確信」に満ちた言葉と、ディキンソンの曖昧で、軽い皮肉さえ感じさせる言葉には大きな隔たりがある。

Hitchcockは科学的に証明される事実として、肉体と魂の不滅を信じていたが、ディキンソンは、彼女自身の経験から、そのような確信がもてないことを語っている。“The Faces of the Atoms”（原子たちの顔）など実際に見ることができるのであろうか、もしそれが本当ならば、“Finished Creatures”（完成した人間たち、生きていた人たち）の顔だけでなく、更にもっと多くを見ることができると。と。

次に挙げる詩の中でも、ディキンソンは、この「化学的な確信」に関連することをうたっている。

Ashes denote that Fire was—
 Revere the Grayest Pile
 For the Departed Creature's sake
 That hovered there awhile —

 Fire exists the first in light
 And then consolidates
 Only the Chemist can disclose
 Into what Carbonates. (1063)

灰は火が在ったことを示す
 この究極の灰色の山を敬え
 そこにしばらくためらって居た

亡き人のために

火は初め光として存在する

それから固まる

どんな炭酸化合物となるか

化学者だけが明らかにすることができる

先に引用したように“fire only changes the form of substances”（火は物質の形を変化させるだけである）と述べた Hitchcock は、どのような物質も、従って人間も、完全に消滅することは無いと確信していた。単に変化するだけであると信じて、すべて納得できたこの化学者と、消失してしまったものに対する深い喪失感や距離感を認識せずにはおれないディキンソンとの相異が歴然としている。

ディキンソンは冒頭に“Ashes”（灰）と“Fire”（火）という、静と動、無彩色と赤、死と生を喚起させるような、対照的な言葉を配している。更に二行目では“gray”ではなく“the grayest”（究極の灰色）の“Pile”（山）という即物的なものを“Revere”（敬え）とうたって、読み手を立ち止まらせ考えさせる。「究極の灰色の山」だけが、“Fire”の後に残された、現に見たり触れたりすることが可能な物として実在している。その“Pile”には“Departed Creature”（亡き人）が、炎が消えて灰になる前に、しばらく火が残るが如く、“hovered there awhile”（しばらくためらって居た）から、敬意を払うべきであると言う。そこに「しばらく」居たかも知れないが実際に残ったのは「灰」だけ——「究極の灰色」という表現に、詩人の喪失感・無力感・寂寥感などが凝縮されている。ここには Hitchcock のように、火によって形が変化しただけで、消滅したのではないという確信は見られない。

Hitchcock は“fire”を“Combustion”（燃焼）の単なる同意語として用いているが、ディキンソンはこの詩の中で、それを物理的、化学的現象の一過程として捉えると同時に、更に敷衍して、生命としても捉えている。「灰」は、か

つては“light”として輝き、赤々と燃え上がった生命＝“Departed Creature”が存在し、燃焼という現象が起きた結果最終的に残されたものとして、この詩の中で大きな位置を占めている。詩人には、生命体が“Carbonates”（炭素）を含むという知識はあるが、灰がどのように変化して生きた人間と結びつくのか分からない。化学者だけが“disclose”（明らかにする）ことができるらしいとうたって、軽い皮肉を暗示している。ディキンソンは Hitchcock の、物質は完全に消滅するのではないという科学説を認めたとしても、「亡き人」に再び会えるという保証はどこにも見出せなかったのである。

ディキンソンが目を通していた雑誌には科学的な記事も多く含まれていた。特に、1859年に Darwin の『種の起源』*On the Origin of Species* が出版されてから、その理論の正当性を巡って専門誌や一般向けの雑誌に様々な論議が掲載された。例えば当時の指導的な植物学者 Asa Gray は1860年発行の *American Journal of Science and Arts* に書評を、更に *Atlantic Monthly* には Darwin 理論の分析を載せている。¹³⁾

ディキンソンが Darwin 等に関する科学的な記事を読んでいたことは、1871年に書いた Elizabeth Holland 宛ての、次のような手紙からも窺える。

Why the Theif ingredient accompanies all Sweetness Darwin does not tell us. Each expiring Secret leaves an Heir, distracting still.¹⁴⁾

この文章の一字一句を理解できるのは、恐らく Holland 夫人のような、日頃から手紙を通してディキンソンと言葉を交わしていた者に限られるであろう。ディキンソンは、人生には Darwin のような科学者の理論だけでは説明できないような側面がある、と伝えているようだ。Darwin の進化論の中軸を成している自然選択説 (natural selection) は、進化に関する科学的な事実を明らかにしたが“Secret leaves an Heir”（神秘は跡取りを残す）と述べて、宇宙の秘密は依然として残されたままである（神秘も Darwin 説のような方法で“heir”を残す）という彼女の考えを、機知を交えて書き送っている。彼女は Darwin

(168)

のことさら自然の否定的な面を強調する悲観論に対して、軽く抗議している。“Sweetness”（甘美）の存在について、彼は何も語っていないと言うのだ。Darwinは1856年に“*What a book a devil’s chaplain might write on the clumsy, wasteful, blundering, low, and horribly cruel works of nature.*”¹⁵⁾と書いている。

ディキンソンはまた、1873年にも Holland 夫人宛てに、次のような手紙を書き送っている。

Science will not trust us with another World. Guess I and the Bible will
move to some old fashioned spot where we’ll feel at Home.¹⁶⁾

科学は“another World”（来世）に関しては何も解明してくれない。死後に行くと思われている「来世」が、昔から聞いている“old fashioned spot”（旧式の場所）、すなわち聖書に書かれている天国のような所であると考えた方が心安らぐと言うのであろう。科学は物質あるいは現象の世界だけに焦点を当てるが、ディキンソンが日頃親しんでいた聖書は形而上の様ざまな問題を扱っている。キリスト教の教義を受け入れなかったディキンソンであるが、この手紙からも彼女が科学の限界を感じていたことが窺える。

次の詩は1875年頃に、ディキンソンが Holland 夫人に宛てに、贈られた本に対する礼を書いた短い手紙の最後に付けられたものである。ここにも、科学は人間が経験する物事すべてを解明するものではないという彼女の考えが表れている。

Nature assigns the Sun —
That — is Astronomy —
Nature cannot enact a Friend —
That — is Astrology¹⁷⁾

自然は太陽を宛てがう
 それは天文学
 自然は友人の役を演じることができない
 それは占星術

この詩の中でディキンソンは自然が太陽を“assignes”（宛てが）い、それは天を科学的に研究する学問、すなわち“Astronomy”（天文学）であるとうたって、自然と天文学という科学を同等に扱っている。更に終りの二行で、自然は“cannot enact a Friend—”（友人の役を演じてくれない）、そうしてくれるのは“Astrology”（占星術）の分野であると言う。ちなみに1875年までに、海王星の存在、彗星の特徴、連星流星体の発生等に関して、次々と明らかにされていった。そもそも天文学は、太陽が太陽系の中心であるという考え方を支持したガリレオやニュートンの理論から発展したものであるから、ディキンソンがこの詩において、自然、太陽、天文学を関連させていることは頷ける。また、近世以前の天文学は、占星術と深く結びつけられていた。ディキンソンは占星術こそ、手紙の対象である Holland 夫人と彼女自身との親しい間柄に拘わっているものとして評価している。

科学の進歩に関心を抱き続けながら、同時にその限界を感じていたディキンソンの考え方は、1884年、再び Holland 夫人に宛てた次の手紙の一節からも明らかである。

I have made a permanent Rainbow by filling a Window with Hyacinths, which Science will be glad to know, and have a Cargo of Carnations, worthy of Ceylon, but Science and Ceylon are Strangers to me, and I would give them both for one look of the gone Eyes, glowing in Paradise —There are too many to count, now, and I measure by Fathoms, Numbers past away —¹⁸⁾

(170)

ディキンソンは窓辺に色とりどりのヒヤシンスを置いて、実際の虹のように短時間で消えることのない“permanent”（長持ちするような）虹を作った、と Holland 夫人に伝えている。ヒヤシンスの開花を、まるで一種の科学技術の賜物であるかのように見立てている。

ちなみに1879年のエジソンの電球の発明によって、それまで街路や公園など屋外の照明に使用されていたアーク灯は次第に電球にとって代わり、一般住宅は電気を利用した光源を得られるようになった。¹⁹⁾ これは画期的なことであった。ディキンソンは“electricity”，“electric”，“electrical”等の語を、8篇の詩に用いているが、電気を初め、次々と進歩していく科学や工業の技術、そしてその言葉に並々ならぬ関心を寄せていたことが窺える。

この手紙の中で彼女はまた、恐らく温室で育った“a Cargo of Carnation”（カーネーションの花束）を飾っていると記している。また、それは貴重な香料の産出国であり、魅力に富んだ遥かな異郷の国であるセイロンほど価値があるものであると述べている。「科学」も「セイロン」もディキンソンにとっては“Strangers”（見知らぬもの）である。もし一目でも“the Gone Eyes, glowing in Paradise”（今は亡き人達の、天国で輝いている目）を見ることができれば、これら貴重なものを両方とも手離しても構わない、と書いている。愛する人達に先立たれた寂しさは、科学も貴重な物も癒してくれない、およそ縁の無いものであると言うのであろう。科学の授業を受け、科学者達の記事を読んだり、講演を聞く機会もあって、関心を抱いていたディキンソンではあるが、科学は彼女にとってまだ馴染みの薄いものとして捉えられていた。

先に触れたような、ダーウィンの自然に対する悲観的な見方とは好対照をなす次の詩は、Susan 宛てに送られた。この作品は1859年頃に書かれたもので、やはりディキンソンの科学に対する反応を映し出している。

So from the mould
Scarlet and Gold
Many a Bulb will rise —

Hidden away, cunningly,
From sagacious eyes.

So from Cocoon
Many a Worm
Leap so Highland gay,
Peasants like me,
Peasants like Thee
Gaze perplexedly ! (66)

このようにして土の中から
深紅や金色の
多くの球根が起き上ろうとする
賢しげな目から
巧みに隠れて

このようにして繭から
多くの幼虫が
楽しそうに高地を跳ぶ
わたしのような無学の者は
あなたのような無学の者は
あっけにとられて見つめるだけ！

ディキンソンも Susan も植物学と昆虫学を勉強したが、この作品の中では両者とも素朴な “Peasants” (農夫, 無学者) として描いている。植物が “Bulb” (球根) から開花し, “Cocoon” (繭) から “Worm” (毛虫) が蝶になって空に舞う過程を, 神秘と驚異に満ちたものとして捉えている。土の下の球根や繭の中の幼虫が生き続け, 全く別の姿に変身する過程の一部始終は, 科学者の

(172)

“sagacious eyes” (賢しげな目) できえも見ることができない、とうたって軽く揶揄している。

次に挙げる作品は、科学的な進歩に対する詩人の、明らかに否定的な反応が表れている。

“Arcturus” is his other name —
I’d rather call him “Star”.
it’s very mean of Science
To go and interfere!

I slew a worm the other day —
A “Savant” passing by
Murmured “Resurgam” — “Centipede” !
“Oh Lord — how frail are we” !

I pull a flower from the woods —
A monster with a glass
Computes the stamens in a breath —
And has her in a “class” !

Whereas I took the Butterfly
A foretime in my hat —
He sits erect in “Cabinets” —
The Clover bells forgot.

What once was “Heaven”
Is “Zenith” now —
Where I proposed to go

When Time's brief masquerade was done
Is mapped and charted too.
What if the poles should frisk about
And stand upon their heads!
I hope I'm ready for "the worst" —
Whatever prank betides!

Perhaps the "Kingdom of Heaven's" changed —
I hope the "Children" there
Won't be "new fashioned" when I come —
And laugh at me — and stare —

I hope the Father in the skies
will lift his little girl —
Old fashioned naughty — everything —
Over the stile of "Pearl". (70)

「大角星」は彼の別名
わたしは ただ「星」と呼びたいのに
干渉してくるなんて
科学は本当に卑劣
わたしは先日虫を殺した
「大学者」が通りかかり
眩いた「レサガム」「節足動物の唇脚類」
「おお わたしたちは何ともろいものか」

わたしは森から花を摘んできた
拡大鏡をもった怪物が

(174)

一気に雄しべを数え
その花を部類分けする

昔わたしは帽子に
蝶を捕らえたのに
今や蝶は「標本箱」の中で
ぴんと立っている

かつて「天」であったものは
今や「天頂」—
時という束の間の仮装舞踊会が終った時
わたしが行くつもりでいた所は
地図に描かれ図表にされている

もし支柱がはね回り
逆立ちしたらどうなるだろう！
どんないたずらが起ころうとも
わたしは「最悪」にそなえていたい

たぶん「天国」も変わったことだろう
天の「幼子たち」が
わたしが行く時は「最新流行」になり
わたしを笑いものにしたり見つめたりしないでほしい

わたしは空の父が
この旧式で聞き分けのない女の子を
「真珠」の踏み段の上に
昇らせて下さるようにと願う

この詩においてディキンソンは、科学が一般の者が日常用いている言葉や考え方に、どれほど影響を及ぼしているか、軽く陽気な調子ではあるが、皮肉を込めてうたっている。“Arcturus”（大角星）などと、科学者のもっともらしい名を付けたが、詩人は単純に、“Star”と呼ぶ方を好むという。科学は我われの日常的な表現の世界に“interfere”（介入する）“mean”（卑劣な）ものと綴って、否定的に描いている。

第二連において話者“I”が「虫を殺した」と思った折に、“Savant”（大学者）が、“Resurgam”（レザガム）“Centipede”（節足動物の唇脚類）などと聞き慣れない言葉を呟いたと言う。ムカデ等の節足動物は、体が切り離されても各々の部分が生き続ける。それに比べて人間は“how frail are we!”（何ともろいものか）と、この「大学者」は教訓めいたことを付け加えることを忘れていない。お節介な「介入」であるという詩人の思いが表われている。

第三連では、「わたし」が森から摘んできた花を科学者は“stamens”（雄蕊）と称するものを数え、何科に属するか分類するとうたう。科学者を“monster with a glass”（単眼鏡をかけた怪物）と呼んで、明らかに戯画化している。

第四連においても、「わたし」が帽子に掴まえた蝶を科学者は“Cabinet”（ケース）に入れて昆虫標本にしてしまう。彼等は果して自然の美しさがあるがままに楽しむ感性を備えているのであろうか、とディキンソンは皮肉を込めて問いかけている。

第五連では科学が詩人の思考にも立入って、「介入」していることを嘆いている。やがてこの世の短い“masquerade”（仮装舞踊会）が終わった時に行くつもりでいた“Heaven”（天国）は、今や科学者によって“Zenith”（天頂、観測者の真上の天球上の点）という即物的な言葉を用いられ、“mapped and charted”（地図に描かれ図表に乗せられている）。かつては神様のお住まいであり、美しく理想的な場所であったはずなのに、科学によってすっかり変わってしまったとうたう。ディキンソンが当時の天文学の知識を把握していたことは窺えるが、同時に科学的知識の真価に疑問を抱いていたことも現されている。

科学の進歩は一般の人々が抱いてきたこの世や来世に対する考え方を、根底から揺さぶってしまうという詩人の鋭い洞察がこの辺りには見られる。

第六連では、科学者達は自然界に存在するものを分類分析し、秩序立てているつもりでいるかも知れないが、“What if the poles sh’d frisk about / And stand upon their heads!”（もし支柱がはね回り、逆立ちしたらどうなるだろう！）と、異なる視点から問いかけている。突然“prank”（いたずら）すなわち、天変地異あるいは予期していない事が起きるとどうなるかというのだ。どれほど科学が進歩しても、人間は自然そして宇宙を支配することはできない、思いがけない不幸が起こった時にも、せいぜい“I hope I’m ready ‘for the worst’ —”（わたしは「最悪」の場合の心構えをしておきたい）、とうたって、やはり軽く揶揄している。

最後の2連において、‘Perhaps the “Kingdom of Heaven’s” changed —’（たぶん天国も変わったことだろう）と、第五連で触れたことを更に明確に言葉に出してうたい、科学が宗教に及ぼす影響を仄めかしている。ディキンソン自身は、“Old fashioned—naughty”（旧式で聞分けのない）少女であっても、天の父が迎え入れて下さるように、とうたって、神への願望を表している。

彼女が一年程後に書いた次の作品の中にも、科学を“superfluous”（不要なもの）と呼んで、否定的に捉らえた詩行が見出される。

If the foolish, call them “flowers” —

Need the wiser, *tell*?

If the Savants “Classify” them

It is just as well!

...

Doubtless, we should deem superfluous

Many Sciences,

Not pursued by learned Angels

In scholastic skies!

... (168)

愚者がそれを「花」と呼んだとしても
賢者が正す必要があるだろうか
学者たちがそれを「分類」したところで
何も変わらない

...

きっとわたしたちは多くの科学を
不用なものと見なすだろう
空の学校の博学な天使たちは
科学なんか追い求めていないのだから

このような作品はディキンソンの、急速な科学の進歩が一般の人々の思考や感性を変えてしまうのではないかという危惧の念を表わしている。それは同時代の彼女が“disgraceful”（不名誉な）と呼んだ詩人 Walt Whitman (1819-1892) の、“When I Heard the Learn’d Astronomer”²⁰⁾（学識ある天文学者の言葉を聞いたとき）における考えとも共通したものである。また20世紀に入っても W. H. Auden (1907-1973) の“The glass-lens / desanctified Sight: men believed / they had seen through Nature”²¹⁾（ガラスのレンズが視覚を冒瀆してしまった。ひとびとは自然が見抜けたと信じたのだ。）²²⁾ や “Space was holy to / pilgrims of old, till the plane / stopped all that nonsense.”²³⁾（宇宙は昔の巡礼には聖なるものだったが、航空機はそのばかげた考えをやめさせてしまった。）²⁴⁾ 等の作品にも相通ずるものがある。従って、科学に対する否定的な反応は、表現の仕方が異なるとしても、ディキンソン独自のものではないと言えよう。

次に挙げる作品は、科学を否定してはいないが、科学の限界を暗示している。

Banish Air from Air —

(178)

Divide Light if you dare —
They'll meet
While Cubes in a Drop
Or Pellets of Shape
Fit
Films cannot annul
Odors return whole
Force Flame
And with a Blonde push
Over your impotence
Flits Steam. (854)

空気から空気を追い出してみよ
できるものなら光を分離してみよ
結合してしまうだろう
一粒の中の立方体なり
鋳型の陶器に
適合するか
薄い膜も消してしまうことはできない
匂はそのまま戻る
炎を押し進めてみよ
そうすれば金髪の一押しで
あなたの無能力の上で
湯気が飛び回る

二行目の“you”は不特定の読み手、あるいは科学者のように実験や分析によって自然界の物象を科学的に解明できると考える者を指すのであろう。そのような者は、自然を科学の研究対象として捉えるが、他の角度から見ることができ

ない。“Air from Air” (空気から空気) を取り除いたり、光を分離しようと科学者がどれほど努力しても、結局それぞれの要素が本来備えている力で“meet” (結合して) 元通りになってしまう。自然界の現象を科学によって支配することはできない。科学によって解明できないような神秘的な力が存在していることを忘れてはならない、と詩人は仄めかしている。

最後に取り上げる有名な作品は、これまでのものと異なり、科学の力を否定していない。

“Faith” is a fine invention
 When Gentlemen can see —
 But *Microscopes* are prudent
 In an Emergency. (185)

「信仰」は見事な発明
 紳士がたが見ることが出来る時は—
 しかし緊急の場合には
 顕微鏡の方が慎重

“Faith” (信仰) は、紳士たちが物事の深奥を洞察したり、啓示を感知することができる場合は“fine invention” (見事な発明) であるという。「発明」とは①新たに物事を考え出すこと、②自然力や自然法則を利用して、社会生活上価値ある結果を収める技術的創作²⁵⁾ であるから、「信仰」は便宜上「考え出」されたものであり、科学的な発明品である“Microscopes” (顕微鏡) と同一線上に置かれていることになる。「紳士がた」が真に見ることができない場合には、「信仰」は役に立たないものだが、「顕微鏡」は少なくとも“Emergency” (緊急の場合) には実際に役に立つものだ、と綴って、詩人は科学の実利的な面を認めている。緊急事態には有用であっても、そうでない時に役に立つという保証はないと仄めかしているようであるが、その点は協調されてはいない。

以上ディキンソンが受けた自然科学教育や、当時の科学の発展状況等に触れ、主に彼女が科学に対してどのような考えを抱いていたか、作品や手紙を通して探ってみた。彼女は、例えば“'Arcturus' is his other name —”に見られるように、科学を、人々の思考に“interfere”（介入する）不愉快なもの、あるいは“If the foolish call them “flowers—”の中でうたっているように“superfluous”（不必要なもの）と、軽い調子ではあるが、否定的に捉えている作品が目立つ。また否定しないまでも、科学の限界を仄めかしたり、揶揄していたりするものもある。しかし、彼女が教育や科学情報を通じて、自然科学の知識習得に大きな興味を寄せていたことは明らかであり、全面的に科学を否定したとは言い切れない。彼女は科学によって解明できない神秘の世界に対する限りない憧憬の念を抱いていた。ディキンソンは、人間の心が科学によって支配することのできない領域であることを認識し、科学万能主義に対して懐疑的であったが、最終的には、科学を容認していたものと考えられよう。

注

- 1) 本稿で用いる「科学」はすべて狭義の「自然科学」の意味。
- 2) Richard B. Sewall, *The Life of Emily Dickinson 2vols.* (N.Y.: Farrar, Straus and Giroux, 1974), p. 338.
- 3) Carlton Lowenberg, *Emily Dickinson's Textbooks* (California: West Coast Print Center, 1986).
- 4) *Letters of Emily Dickinson*, eds. by T. H. Johnson and T. Ward. 3vols., (Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1958), #6. 以下 Letter # — と表示。
- 5) Letter #99
- 6) Letter #20
- 7) Sewall, p. 344.
- 8) Letter #487
- 9) Robert Bruce, *The Launching of Modern American Science 1846-1876* (Ithaca, NY: Cornell UP, 1987), p. 339.
- 10) Lowenberg, p. 91.

- 11) *The Poems of Emily Dickinson*, ed. Thomas Johnson (Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press, 1955). 本稿における詩の番号は、すべて上記の詩集による。
- 12) Scwall, p. 345.
- 13) Asa Gray, "Darwin on the Origin of Species." *Atlantic Monthly* 6 (July 1860) : 109-116, (August 1860) : 229-239.
- 14) Letter #359.
- 15) *ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA vol. 7*, (ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA, INC., 1964), p. 84.
- 16) Letter #395.
- 17) Letter #439.
- 18) Letter #882.
- 19) 相賀徹夫編, *GENRE JAPONICA『万有百科大事典17科学技術』*, 小学館, 1973年, p. 439.
- 20) Walt Whitman, *Leaves of Grass*, eds. by Sculley Bradley and Harold W. Blodgett, (N.Y. : W. W. Norton & Company. Inc., 1973), p. 271.
- 21) W. H. Auden, *Collected Poem*, ed. Edward Mendelson, (Faber & Faber, 1976), p. 853.
- 22) 沢崎順之助訳編, 『オーデン詩集』思潮社, 1993年, p. 131.
- 23) Auden, p. 853.
- 24) 沢崎順之助, p. 131.
- 25) 新村出編, 『広辞苑 第二版』岩波書店, 1969年, p. 1803.